E 18　イギリスの住居分野における女性（第2報）

― オクタビア・ヒルの再評価をめぐって ―

目白学園女短大　中島明子

目的　本報告は昨年に引続き「イギリスの住居分野における女性」について、住居管理に関する論争、特にオクタビア・ヒルの再評価について述べるものである。

方法　関連資料・文献および関連機関・個人へのヒアリングによる。

結果　オクタビア・ヒル(1838-1912)は間違いなく"住居管理の母"であるとされてはいるがその評価は確定しているわけではない。ヒルの死後、ヒルの信奉者による過大な評価とその批判、弟子たちによって組織された住居管理人の職能団体（当初は女性のみ、1948年に男性の入会が認められた）の今日に至るまで（現在はthe Institute of Housing 略称IOH）の論争、そしてこのIOHが認めている住居管理人資格に対する批判等がこれまでにもみられた。しかし'80年代以降のオクタビア・ヒル再評価の動きは、底流にはフェミニズムの影響がみられるが、イギリスの住宅事情と住居管理の1つの必然的な流れとして出てきている。その中心がアン・パワー（Anne Power）である。彼女の主張は、地方自治体による公営住宅の管理が＜官僚的＞＜物中心的＞であると批判し、これに対して①住居管理にかかわる諸機能の統合の必要、②地域に定着した方法、③住居管理への居住者の効果的直接的参加である。これは'70年代からみられる居住者の住宅政策、住宅管理への参加システム（コーポラティブ・マネージメント他）を継承しており、実際に＜優先団地管理プロジェクト＞を精力的に推進させている。そうした面からオクタビア・ヒル・システムを人間的なコンタクトや生活改善の視点の重視も含めて評価している。背景には第1報で述べたイギリスの住宅事情があり、またサッチャー政権の下での矛盾も出てきている。